

言葉の 周圏分布考

松本 修

Matsumoto Osamu

はじめに

言葉は旅です

日本語。私たちが使っているこの言葉は、長い年月、二重の意味で日本を旅してきました。徳川前期の俳人・松尾芭蕉（一六四四〜九四）が『おくのほそ道（奥の細道）』（一七〇二刊）の冒頭で、時について、旅になぞらえてこう綴っているのを、私たちは知っています。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。

つまり月日とは、永遠の時を行き過ぎる客であり、去来する年もまた旅人であると……。であるならば、時を生きる言葉もまた歴史の旅人であったと言うべきでしょう。

しかしその言葉の旅には、ただ時を流れゆく旅とまったく別に、さらにもうひとつ、驚くべき旅が重なっていました。日本語は、都で日々新たに生まれては、地方に向けて、地を這うような、まったく違う旅をもまた続けていたのです。

都で栄えた新しい日本語の語彙や文法事象は、やがて都を出で発って地方へと歩みを進め、峠を越え川を遡って諸国の町々に、さらにそこを拠点に、辺境の村々まで旅しました。

古くから、政治・文化の中心であった日本の首都は、主に畿内のエリアで変遷しました。その中で九重に花ぞ匂える京は、西暦七九四年から、明治維新によって東京奠都（東京に都を定めること）がなされた一八六八年まで、一〇七四年もの長きにわたって首都の地位にあり、威

光に満ちた日本文化の発信センターでした。もちろん、言葉においてもこの地位は変わらず、京は、新しい日本語を生み出す聖地だったので。現在の日本の言葉、そして方言の多くは京で育まれ、地を這う旅を四周に続けた結果として存在しているのです。

私たちのテレビ番組『探偵！ナイトスクープ』（朝日放送テレビ）で「アホ・バカ」の謎を解明するため、私が方言学を学んだ師は、当時、大阪大学教授だった徳川宗賢先生（一九三〇～九九）でした。徳川幕府八代將軍、徳川吉宗に繋がるお方で、「殿」と見まがう風格ある先生でいらつしやいました。

京の都で生まれた言葉は、マスコミも教育制度もなかった昔、人から人へ「口伝くちづて」で全国に広まりました。徳川先生にお会いした当時、先生のご研究では、言葉が都から地方に向けて伝播でんぱする速さは、定規で測った直線距離で、一年間に九三〇メートルという計算でした。年速は一キロ弱。長い年月の間に政治や交通などさまざまな変化・進展があつたにもかかわらず、言葉の旅の年速は一キロ弱であつただろうというのです。

方言学の泰斗・井上史雄先生（一九四二～）に、『日本語は年速一キロで動く』（二〇〇三）という著作があります。主として現代を生きる若者らの「新方言」が広がる速度を考察した研究ですが、そこでも「大きな傾向として、年速一キロ弱というのを手がかりにしてよさそうである」と結論されています。

都の言葉は地方に向けて、東西南北同じような速度で広まりました。その結果、京の古語が、日本の東西に「周囲」(周りにまわるをなす)分布をする跡を残したのです。

たとえば京から現代の首都・東京のある武蔵国むさしのくにまでは、直線距離で三六〇キロばかりです。この地に辿り着くために京を旅立った言葉は、およそ四〇〇年もの年月をかける、遙かな旅をゆかねばなりませんでした。つまり、これは記憶すべき重要なポイントですが、関東の言葉は、室町後期から徳川前期にかけての京の古語をベースに成立しているのです。

東北の北部や九州の西南部は、京から六〇〇〜八〇〇キロも離れているため、ここまで辿り着くには、さらに長い年月がかかりました。本土両端のこれら地域には、七〇〇〜八〇〇年も前かもしれない、さらに古い京の言葉が残されることになりました。

ただ北海道は、この言葉の旅にはあまり縁がありません。西南部の渡島半島おしまなど一部を除き、北海道は近世までアイヌ人の地、すなわち蝦夷地えぞちであり、和人が大量に入植した歴史は明治以降と、きわめて新しいからです。

また、琉球列島についても、言葉の旅の仕方は、本土とは異なります。古代より、本土の人々が九州南部から舟に乗って移住するという形で和語を運びました。一五〇〇年以上前から和人がこの南の島々に移り住み、一四二九年に琉球王国が建設されると、本土と隔絶された国家として、独自の歴史を歩きました。その結果、琉球王国が支配した沖縄県と鹿児島県の奄美

地方とは、日本語の祖先を豊かに残す、奇跡の地となったのです。

ところで「日本」という国号が公的に定まったのは、飛鳥浄御原令の施行（六八九）以来と言われます。それまでは「ヤマト」と名乗っていました。これは千数百年の時を経て、現代でも琉球の人々が本土の人を「ヤマトウ」ンチュと呼ぶのに反映されています。

私はこの本で、日本の魅力ある言葉たちが、どんな風に生まれ、どれくらい歳の月をかけて日本列島を旅したかを、できるだけわかりやすく、かつ楽しく解き明かそうと試みます。

五十数枚のオリジナルのカラー方言分布図を解説してゆく旅の道案内には、たくさんの一流芸能人の方々に花を添えてもらうことにします。登場順に、吉永小百合・山口百恵・松田聖子・八千草薫・加賀まりこ・壇蜜・藤原紀香・満島ひかり・南沙織・仲間由紀恵・新垣結衣・二階堂ふみ……このような数多くのスター女優の皆様にも、すべて無断で出ただくという暴挙をもってして、超豪華な布陣で臨みます。

さらに個人的な知友、国文学名探偵・小竹哲氏と、私のアシスタントのひとりダン・ミッツ嬢も、それぞれが頭脳の鮮やかな切れ味と、明るい人柄とで大活躍を見せてくれます。

心延え豊かな日本人の言葉の歴史が、方言の周囲分布のさまによってクリアに浮き彫りにされるのを実感したとき、あなたはきっと、ひとりの日本人として、誇らかしく、輝かしい知の花園に到達した歓びに包まれることでしょう。

目次

はじめに 言葉は旅する

3

序章 「好き」を表す日本語は「好き」だけか？

「好き」を何と表現するか？／全国の方言を調査する／古語は辺境に残る／方言圏論の登場／「OH！」から始まったJAPAN／魔法の箒に乗って

15

第一章 御所から広まる高貴なことば

日本人の上(カミ)の意識／「御所ことば」と醤油／小皿を「おてしよ」／菜切り包丁を「ナガタン」／江戸はどのように「言語島」であったか／都市・江戸の文化発信力／「葬儀」分布図における江戸のオリジナル／「おかず」の分布図／「大根」の古称は「おぼね」／日本人の

33

食事の原形／オニギリを「ムスビ」「オムスビ」／「沢庵」をコーコー／「甘鯛」をグジ／「ちやんちゃん」の驚異

第二章

紫式部さん、あなたは『源氏物語』の中で、

「戻る」を使いましたか？

『源氏物語』の「戻る」の謎／周囲分布する動詞たち／動詞「はえる」の描く円／動詞「交換する」の描く円／動詞「めかす」の描く円／動詞「手伝う」の描く円／動詞「弁償する」の描く円／動詞「節約する」の描く円／「帰る」の分布図を読む／帰るの意味の「モデル」の登場／ミスをはらんだ「帰る」方言の調査／帰還を意味する「帰る」分布図／「もう」の分布図／ふたつの「もう」の違いからわかるもの／「きつと、帰るよ」の「きつと」の分布図／「戻る」が初めて『源氏物語』に出現したわけ／藤原定家と河内守を凌ぐ「別本」の価値／『散木奇歌集』と『為忠集』の「戻る」／「もどる」はいつ、「帰宅する」という意味になったか／『源氏物語』の過去の現代語訳に、「戻る」はなかった／和泉式部と藤原行成が描いた「戻橋」／常陸の前司の姫君は「帰った」のか？／都びとが自宅に「戻った」時代／「帰る」「戻る」の超

千年史

第三章 琉球のことばが浮かび上がらせる日本語の原像

「モデル」はどこまで遡るか？／本土と琉球の母音の対応規則と濁音の問題／琉球は本土の言葉を勝手に濁らせない／『日本霊異記』の「毛止利天」とは何か？／奄美と先島という琉球の辺境／琉球の「ムディユン」とは何か？／「もとる」か「もどる」か？ 『日本霊異記』の謎／「戻」本来の意味について／「もとる」か「もどる」か？ 『類聚名義抄』の謎／「軸」を回転させるイメージの語群／「もどる」とのみ校注した唯一の学者／琉球で「もどる」が生き延びたわけ／若き日と学問と

127

第四章 豊かな方言の時代を生きてきた

訪問者の出で発ちことねぎらう「お出でやす」／京阪の「お出でやす」「お越しやす」論争／「鶏肉」の分布図／「ゆで卵」の分布図／「刺身」の分布図／「おやつ」の分布図／「まずい」の分布図／「いや」の分布図／「手が届かない」の分布図／「ありがとう」の分布図／「こ苦勞さん」の分布図／柳川人の「いいえ」は「ウンニャ」

183

第五章

『蝸牛考』の原点へ

「めっちゃ」が日本を制覇していった日々／柳田國男が調査しながらも作成しなかった「夜の挨拶」分布図／「さようなら」のココロは「また会おう」／「アヤカリ」仲間たちは「コッペ」仲間でもあった／文献に残されなかった都ことば「イツソ」／方言文法の周囲分布／仮定「たら」の分布図／「けど」の分布図／「ながら」の分布図／『蝸牛考』を越えて／「ええっと」の分布図／柳田調査から六五年後の「カタツムリ」の名称／柳田國男の方言周圍論についての自己評価／柳田の五重の同心円の向こうにあるもの

結びの章

時空を超えて

波照間の海辺にて／方言周圍論は、疑似科学か？／「方言学の不幸」を乗り越えて

あとがき 著者に代わって 小竹哲

主要参考文献・資料

方言分布図の作図について

- 分布図は、一九九二年に回収した全国市町村へのアンケート調査の回答に基づく。著者の指導のもと、山本静が作成した。
- 同じ表現の地域が連続する場合、数市町村をまとめてひとつの記号で示した。孤例などは一部で省略した。
- 琉球列島の凡例は適宜「琉球」、または「奄美」「沖縄」と表記。また後学の資料となるよう回答語彙の省略は、極力避けた。
- 分布図を作り、円周を描くに当たっては、分布の現状に従うことをいちばんに考え、そのうえで『日本国語大辞典』第二版（小学館）などで文献を確認しつつ、自己の考察を働かせた。円周の破線は、いったん伝播したものの消失したという推定を示す。京を中心点とする円のほか、江戸（現在の東京）、首里（琉球王国の首都）を中心点とする円も描いた。多くのケースで、外側の円から順々に伝播したものと考える。
- 伝播順は著者なりの現時点での解釈・推定を示しているに留まるものであって、いずれの図面でも、必ずしもこの推定順位に固執するものではない。より卓越した知や新資料によって、さらに真理の追究がなされるべきものと考ええる。なお、円周とは別に、↓（矢印）でも地理的伝播の様子を示した。多くは円周の順位はどこかに組み込まれるべきものと考ええる。

本文、引用文の記述について

- ふつう「江戸時代」と呼ぶところを、「徳川時代」に統一した。これは都市名の「江戸」を、「江戸時代」と混同されるのを避けるためである。また、「京都」を指すのに、滋賀生まれの筆者の郷土の習慣にも従って、歴史的な呼称「京」を用いている。
- 引用文献は、任意に原文の表記を現代表記に改めた。また、漢字をかなに開き、かなを漢字にし、旧字を新字に改めたり、疑問符を付すなども行った。ルビ、傍線、文字囲みも同様に、著者が任意に付した。ただし「ぶんまわし」の傍点に限っては、柳田國男自身によるものである。

方言分布から言葉の生成や伝播の歴史を明らかにする「言語地理学」に則って本書を書きました。指導を仰いできた、日本でのこの学の開拓者たる、ふたりの師の文章を、謹んでここに掲げます。

わずかに柳田国男や小林好日による研究があつたけれども、特に柳田の「蝸牛考」など名のみことごとしく喧伝されながら、学の継承者を生むことができなかった。本格的な言語地理学がこの日本で継続的な活動を始めたのは、ほんの数年前のことであつた。

徳川宗賢（「日本方言地図への道」一九六二）

いま、大きな声、賑やかなおしゃべりとパイプの煙が忽然と消えた、この地上に残されて思う。グロータース神父の言語地理学が葉を出し、たくさんの花をつけることを願うばかりである。言語地図が単なるデータの展示場に終わることなく、歴史再構の知性が働く場になることを含めてである。

柴田武（「言語地理学者グロータース神父を悼む」一九九九）

(アンケート用紙2枚組みの1枚目)

「方言は 郷土の誇り 母の愛」

全国市町村アンケート調査

(希望回答期限：2月末日)

(市郡・町村に○印をつけてください。)

	都道 府県		支 庁		市 郡		町 村
--	----------	--	--------	--	--------	--	--------

旧国名(伊・群・越・美・信・越・北越)

江戸時代の支配(縣・天領)

(わかりにくい場合は、空白で結構です。)

次の文章を丸ごと、ご当地の方言に翻訳してください。

漢字ではなく、「カタカナ」(または「ひらがな」)、あるいはそれが不可能な場合「発音記号」でご記入下さい。複数の表現がある場合は、すべてお書きください。標準語どおりの場合は「標準語」で、適切な表現が思い出せない場合は、空白でも結構です。カッコの言葉は各地の方言例です。ニュアンスの説明・類似語など何なりと「解説事項」がございましたら、下欄にご記入ください(紙面不足の場合は、別紙を設けてご記入ください)。)

ああ、疲れた!(ソド!・エラ!・コイ!キリ!)	きのう(キ)は、	すごく(ドリア)、	疲労したよ(ワコシク・クビレ)。
うごく(イ)のも、めんどうだ(ヨリ)。	ジャンケン(キキ・チリ)しようよ。ジャンケンポン!	グー・チョキ・パー	
かわいい(イイ・ナシ・カ行)	娘(メシ・オ)を	からかう(ヨラガ)のは	かわいそう(ムイ・モツキ)じゃないか。
おとうさんが言った(イハク・イソシヤ)ところ(ト)へ、	どうして(ケデ・ナレ)	行けないのだ(イカヘン)。	
私たちの(ワタシ)先輩(ゼンバ)は、	いつも、言われた(イハク)ものだ。	ご飯を、	食べながら(シ・イモリ)。
しゃべっては(シ)いけない(イカ)。(と(ケ)テ)。	うるさい(ソシ・セカシ)!	静かに(シ)なさい!	

方言ご解説欄 (ニュアンス・使用法の違い・類似語など、何であれ解説の要があれば、お書きください)

1991年12月に全国すべての市町村教育委員会に発送したアンケート用紙の最初のページ

序章 「好き」を表す日本語は「好き」だけか？

「好き」を何と表現するか？

平成三年（一九九二）のこと、私は全国すべての市町村に向けて方言アンケート調査に乗り出そうと、ワープロ「文豪」のキーボードを叩いていました。

私の心に浮かんでいたのは、中学時代に読んだ三島由紀夫の小説『潮騒』（一九五四・新潮社）の世界でした。このベストセラー小説は何度も映画化され、吉永小百合、山口百恵、堀ちえみなど時代に輝くトップ女優が主演を演じて高い人気を呼びました。

「歌島は人口千四百、周囲一里に充たない小島である。」島の無垢な若者、漁師の新治と海女の初江。ふたりは別々に、嵐を避けて逃げ込んだ観的哨跡で、裸同士で向き合います。

「その火を飛び越して来い。その火を飛び越してきたら」と、初江は清らかな弾んだ声で、新治を鼓舞します。彼らのようなちよつと古い時代の全国の若者が、プロポーズを方言でしゃべったら、どんな言葉になるのか。私は、次のような若い男女の会話を考えました。

男「僕は、君が、**好き**なんだ！ 嫁に来てくれ！」

女「私もあなたに、惚れてたの」

左が「好き」の調査結果です。「好き」だらけでした。「好き」には方言がないのでしょうか。

「好き」(僕は、君が、好きなんだ!)

凡例

- スキ (千葉の一部でスイ・琉球でシチ、ヒツ等)
- スイテル
- スイトル
- ♥ イイ
- ♥ エエ
- △ ホレテル
- ✿ キガアル

スキ

スイトル, スイテル (山梨, 埼玉, 長野)

イイ, エエ

京の都が
円の中心

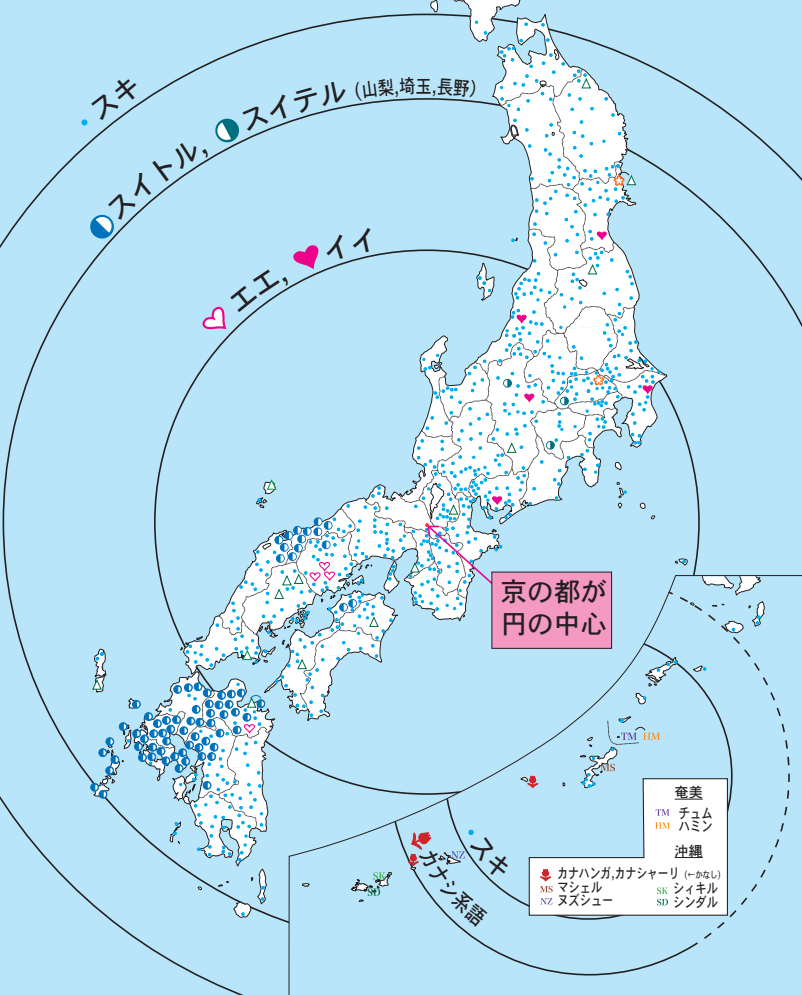
スキ
カナシ系語

奄美

TM チュム
HM ハミン

沖縄

- ↓ カナハンガ, カナシャーリ (←かなし)
- MS マシエル SK シキル
- NZ ヌズシュー SD シンダル



中学時代に読んだ、千葉県ちばの矢切村やぎりが舞台の、伊藤左千夫いとうさちお『野菊の墓』(一九〇六)でも、「好き」でした。聖子ちゃん世代はみな、彼女がこの映画に主演したことをよく覚えていきます。

「政夫さん……わたし、野菊の様ようだって、どうしてですか」

「さあ、どうしてということはないけど、民たみさんは何がなし野菊の様ような風ふうだからさ」

「それで政夫さんは、野菊が好きだって……」

「僕大好きさ」

(新潮文庫版より)

政夫は年上の民子が好きなのに、「好き」と言う勇氣がなく、やむなく、まず民子を「野菊の様」だと言い、民子にリードしてもらって、野菊が「大好きさ」と告白するのです。回りくどさはコントのようで、「好き」は昔、安易に口に出しづらい言葉だったかと見えます。

分布図を読むと、九州北部や鳥取・島根などでは「好き」ではなく、「好いとる」で占められています。その一方、東日本では、「好いとる」が散在しており、「好き」のこうした、学術用語にいう「アスペクト形式」が周囲分布しているのです。

「いい(ええ)」も希薄に分布、円を描いているかのようです。これまた中学時代に読んだ、川端康成『伊豆の踊子』(一九二六)を思い出させます。この作品も吉永小百合・内藤洋子など、

各時代のトップ女優が映画で主演しました。踊子たちが一高生について噂し合います。

「いい人ね」

「それはそう、いい人らしい」

「ほんとにいい人ね。いい人はいいね」

(新潮文庫版より)

いい人はいいと、慎ましやかな少女は、そんな言い方で「好き」を表現していたのでしよう。私の中学時代の読書の記憶は、「好き」について、優しい思いを巡らせてくれました。

「好き」は動詞「好く」の連用形であり、この「好く」はニュアンスがちよつと違いますが、一一世紀の『源氏物語』に「すいたる人」(色好みの人・恋に打ち込む人)という風に見いだせます。しかしもつと昔、日本人は「好き」の思いを何と言っていたのでしよう？

古代語を多く残す琉球列島を見ましよう。沖縄本島の周囲の離島や先島諸島に、「カナシャーリ」など「かなし」から変化した語が見られます。「好き」以前は、「愛し」だったようです。『万葉集』(七五九年以降成立)巻一八で、大伴家持(七一八〜七八五)はこう詠っています。

父母を 見れば尊く 妻子見れば
かなしくめぐし

すなわち、「父母を見れば尊く思い、妻子を見れば**天好き**でいとおいしい」と。

『万葉集』の、東歌あずまうたを集めた巻一四にも「**かなし妹**」(天好きな妻)が見られ、「かなし」は当時、すでに本土で広く「好き」を伝える言葉だったと理解できます。

「好き」の意の「かなし」はおそらく奈良時代を遡り、二〇〇〇年前の弥生時代には本土で話されていた言葉、いわゆる「日本祖語」であったでしょう。それが平安期以降に生まれた新しい「好き」の勢力に追われて、今なお遠い南の島々でひっそりと生き延びているのです。

全国の方言を調査する

日本語への私の興味は、「好き」だけに限られていたのではありません。当時、日本で未調査だった多くの言葉についても知りたかったのです。そこで全国方言調査を思い立ちました。

その目的は、何よりも私の仮説を証明したいがためでした。方言は、ひとつの指針をもって調査しさえすれば、原則として、同心円を描いて分布しているのではないか？

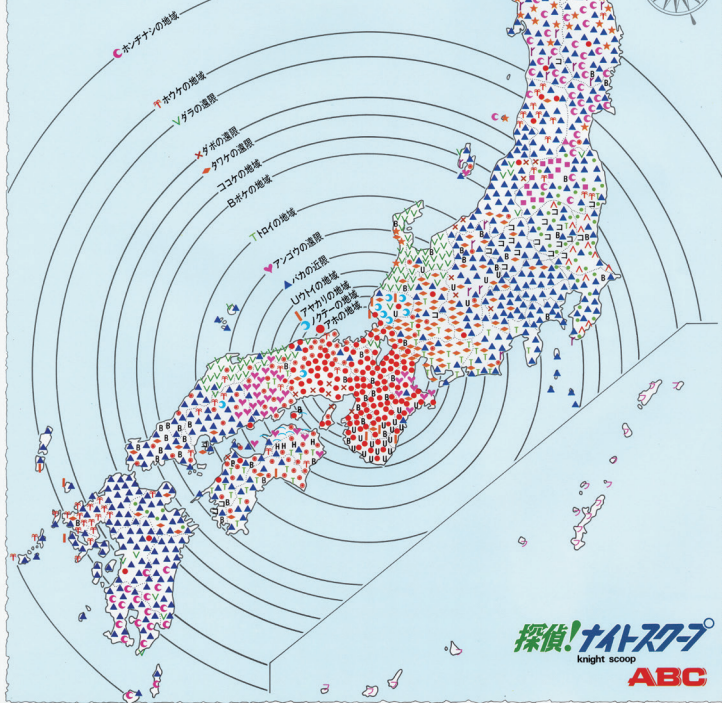
そう考えた契機は、『探偵！ナイトスクープ』の一九九一年五月二四日に放送した「全国アホ・バカ分布図の完成」編にありました。「アホ・バカ」方言(左図)では、「ホンジンアシ」「ダラ」「アンゴウ」など二〇ほどの方言が、京を中心点として同心円を描いて分布していることが判明し、柳田國男(一八七五～一九六二)の「方言圏論」の正しさを証明しました。

全国アホ・バカ分布図

主要23語〈凡例:推定伝播順〉

1	フ	フリムン系語(注:フリムン等)	9	コ	コケ(注:コケヤク等)	17	アホウ系語(注:アホー・アハー等)
2	ホ	ホシチナン系語(注:ホシチナン等)	10	B	ボケ(注:ボケヤク等)	18	アホ(注:アホヤク等)
3	フ	タカラダ系語(注:タカラダ・タカラダ等)	11	T	トロイ(注:トロイ・チロイ等)	江戸	デレ(注:デレステ・チレ・チレステ)
4	▲	バカ系語(注:バカ・バカ・バカ・バカ等)	12	U	ウイ(注:ウイヤク・ウイヤク等)	発	ゴジャ(注:ゴジャヤク)
5	▲	ホウケ系語(注:ホウケ・ホウケ・ホウケ等)	13	♥	アンゴウ(注:アンゴウヤク等)	地	オンツァ(注:オンツァヤク等)
6	▽	ダラ系語(注:ダラズ・ダラン・ダラヤク等)	14	▲	アヤカリ系語(注:アヤカリヤク等)	方	ホッコ
7	×	ダボ(注:ダボ)	15	メ	メクイ系語(注:メクイヤク等)	語	H・ホレ
8	○	ダワケ(注:ダワケ・ダワケ等)	16	★	ハンカクサイ系語(注:ハンカクサイヤク等)		

ただし江戸発・地方語いずれも元は中央(京阪)語



1991年10月、日本方言研究会53回大会の「全国アホ・バカ方言の研究」の発表に際して、配布された分布図

私は「アホ・バカ」方言は特殊な例外ではなく、同じような同心円は、まだいくらでも見つかるはずだと考えました。関西の「アホ」を挟み、中国地方以西は「東国語の宝庫」でした。注目すべきは、ここかと。東京語（関東語）と異なる関西語は何か？ 東京の「トリニク」は、関西では「カシワ」。東京の「スレバ？」は、関西では「シタラ？」。東京語は、関西語を挟んで、西日本にも分布しているのではないか？ この発想で調査すれば、多重圏が数多く見つかるとは違いない。さらに私は、自分の上方語の広がりにも興味がありました。

そこで一九九一年末、全国の市町村教育委員会＋東京の個人（総数三、二四〇）に、「アホ・バカ」調査報告の冊子に添えて、方言の再アンケート調査用紙を送付しました。そのお札に集計結果（その一部がこの本）を、再び冊子に纏めてお届けすると約束しました。この本を自前で全市町村にお贈りすることで、私は三〇年前の約束を果たす決意です。さらに第三次アンケートも添えて。「アホ・バカ」当時まだ少年だった現在の奥田智・近藤真広両プロデューサーも、視聴者に寄り添う番組の姿勢と軌を一にしたこの決断に、意義を認めてくれました。

さて、最終的に再アンケートを回収した市町村総数は一二〇八、回答率は約三七・三%。回答者平均年齢は五六歳で、テレビのまだない、方言の花咲き誇る時代に育った世代でしょう。

集計と作図を続けて三〇年、調査語は予想に違わず、ほとんどが多重圏分布していました。たとえば左は「たびたび注意してたのに」と言うときの副詞「たびたび」の方言分布図です。

「たびたび」(たびたび注意してたのに)

凡例

- タビタビ
- ★ タンビタンビ (タンベンタンベン)
- ★ タンビニ (タンビユニ等)
- センド (センドモ)
- ▼ イッツモ (エツチモ等)
- ▽ イツモ (イツモカモ等)
- サイサイ
- セーサー (←再々: シアアシアア)
- ネンジュウ (ネンジュ)
- ナンベンモ (ナンベンテン等)
- ナンカイモ (ナンケーモ)
- ナンドモ・ナンドカ (ナンドン)
- ナンドンカンドン 等
- ムッタド (ムタド・ムツトリ)
- セツカク (セツカク)
- ジット (ジツトカ等)
- シジュウ 等
- G ゴットイ (ゴツトリ等)
- E エータイ (←永代)
- E イツラグ (エスラグ)
- ↑ トーシ (トウシイ)
- ↑ サンザ (←歌々)
- N ナンボモ (ナンボモ)
- M マイド (マイドマイド)
- M メタ (メタメタ)
- D ダラニ (ダラダラニ)
- Y ヨー (ヨク)
- I ベッタリ
- Z スツサリ
- B ヤツサリ
- B ビツシユ
- B トロビユ
- B ネンス
- チョクク
- チョコチ
- チョイ
- ショウ
- シヤ
- サンド
- サイ
- エツ
- バン
- コン
- トキ
- ジョ
- イツ
- デ
- トツ

■ チョイ
▼ イッツモ, ▲ ショツチュウ

■ チョコチ

◆ トキドキ

★ タンビタンビ, ★ タンビニ (東は山形)

★ トーシ (東は新潟)

↑ ネンジュウ (東は埼玉, 新潟)

○ サイサイ → ○ セーサー

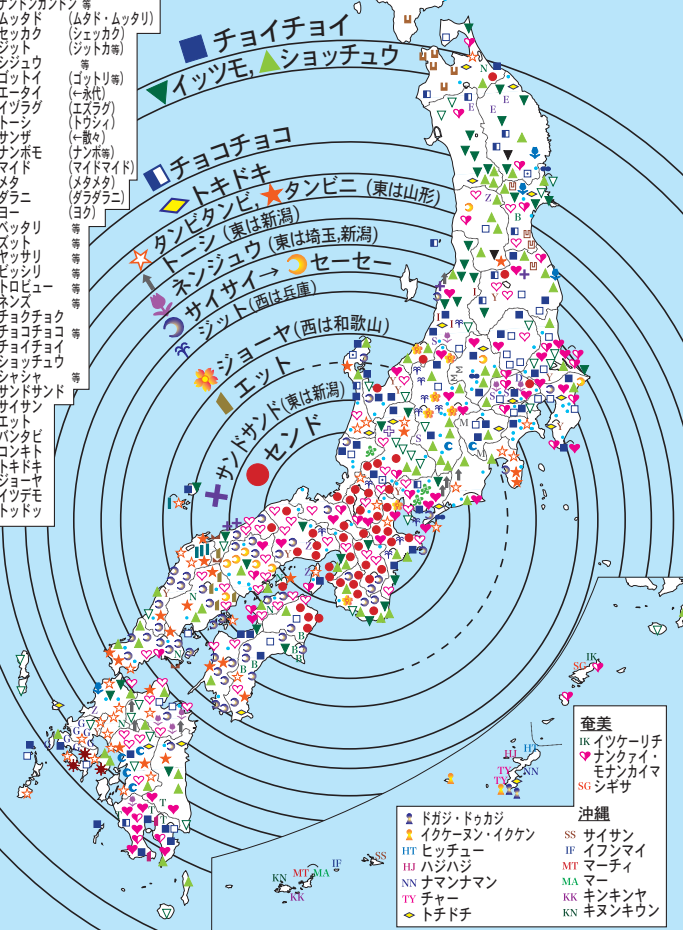
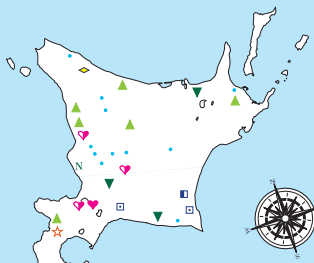
○ ジット (西は兵庫)

○ ジョーヤ (西は和歌山)

○ エツ

○ サンド (東は新潟)

○ センド



奄美
 IK イツケーリチ
 ♥ ナンカイ
 ♥ モンカイ
 SG シンギサ

沖縄
 ● ドガジ・ドゥカジ
 ● イクエーン・イクエン
 HT ヒツチュウ
 HT ハジハジ
 NN ナマンナマン
 TY チャー
 ◆ トチドチ

SS サイサン
 IF イフンマイ
 MJ マーチ
 MA マー
 KK キンキンヤ
 KN キヌンキウ

この語でも分布図には、最新語「セント」に至るまでの話しことばの重層的な歴史の跡が、輪切りにされた樹木の年輪のようにくつきりと浮かび上がっています。

続いて、これも流行りすたりの多そうな副詞で、「どっさり」「どっさり」、食べたいな」の「どっさり」。「イッパイ」を最古とし、「ギョーサン」を最新語として、多くの言葉が興亡を繰り返した軌跡が浮かび上がります。このような副詞の多重の同心円は予測されたことでした。

最初の「イッパイ」は、ある種の器に「ギリギリ一杯に」何かが盛られたさまをイメージさせますが、途中「ウント」「タント」と擬態語のようなものが栄えたのは、発言者の感情が反映させやすかったせいでしょう。そして最後には「山を仰ぐほど」と大げさに表現するのが面白いとされ、和製漢語「ギョーサン（仰山）」が生まれたものかと思えます。

「江州人」すなわち滋賀県人の私には「ギョーサン」は、なじみ深い言葉です。江州人はいつも京に学んで新しい言葉を使ってきたのです。今は、近江米などと近江という呼び方が盛んですが、私の幼い頃は江州米（こうしゅうまい）と言ひ、自ら江州人と称していました。同様に、播磨国（はりまのくに）（兵庫県南部）で生まれ育った柳田國男は、播州人（ばんしゅうじん）と自称しています。

このように方言分布図を解説して、日本の話しことばの変遷の歴史を明らかにすることを主たる目的とした学問的手法を「言語地理学」と言います。分布図を、文献と照合しながら分析してゆけば、日本語や日本人の発想や心の軌跡までも読み取ってゆけると思われるのです。

「どっさり」(どっさり、食べたいな)

凡例

- イッパイ (イッペー・イッペコト・イッペー等)
- スツパリ (ジツパリ・九州でズンバイ、スツッ等)
- ドッサリ (ドッサイ・ドッサト等)
- ウント (ウント・ウントコ等)
- ▽ ヨーンニョ (ヨノ・ヨンニュー・ニョンニョ等)
- タント (タート)
- ♡ ヨケイ (ヨケイ)
- ♥ ヨーケ (ヨッケ)
- ♣ ガイニ (ガイネ)
- キョーサン (キョンサ)
- ジョーサン
- ヨーサン
- タクサン (タクシャ)
- エラ (イラ)
- ダイブ (ダイブ)
- ▲ テックカイクト (テックカイクト)
- ★ エット (エットコト等)
- オ (トート)
- S (ハンド)
- ★ ジョウニ (ジャーニ等)
- ↑ タイソウ (タイソ)
- ↑ コジャント (過去は仙台に)
- ↑ パサロ (バサラカ等)
- N ノッコラド
- M テツベ
- M ミツラフク
- M シコタマ
- D ドサマク
- ≡ ググスリ
- ≡ ググサリ
- ≡ フチ
- H ピヤ
- R ホー
- B ラツ
- T タイ
- T チェ

● イッパイ

■ スツパリ

□ ドッサリ

□ ウント

○ タント

♡ ヨケイ → ♥ ヨーケ

★ エット (西日本), D ドード (新潟)

♣ ガイニ

▲ テックカイクト

● キョーサン

▽ ヨーンニョ ←

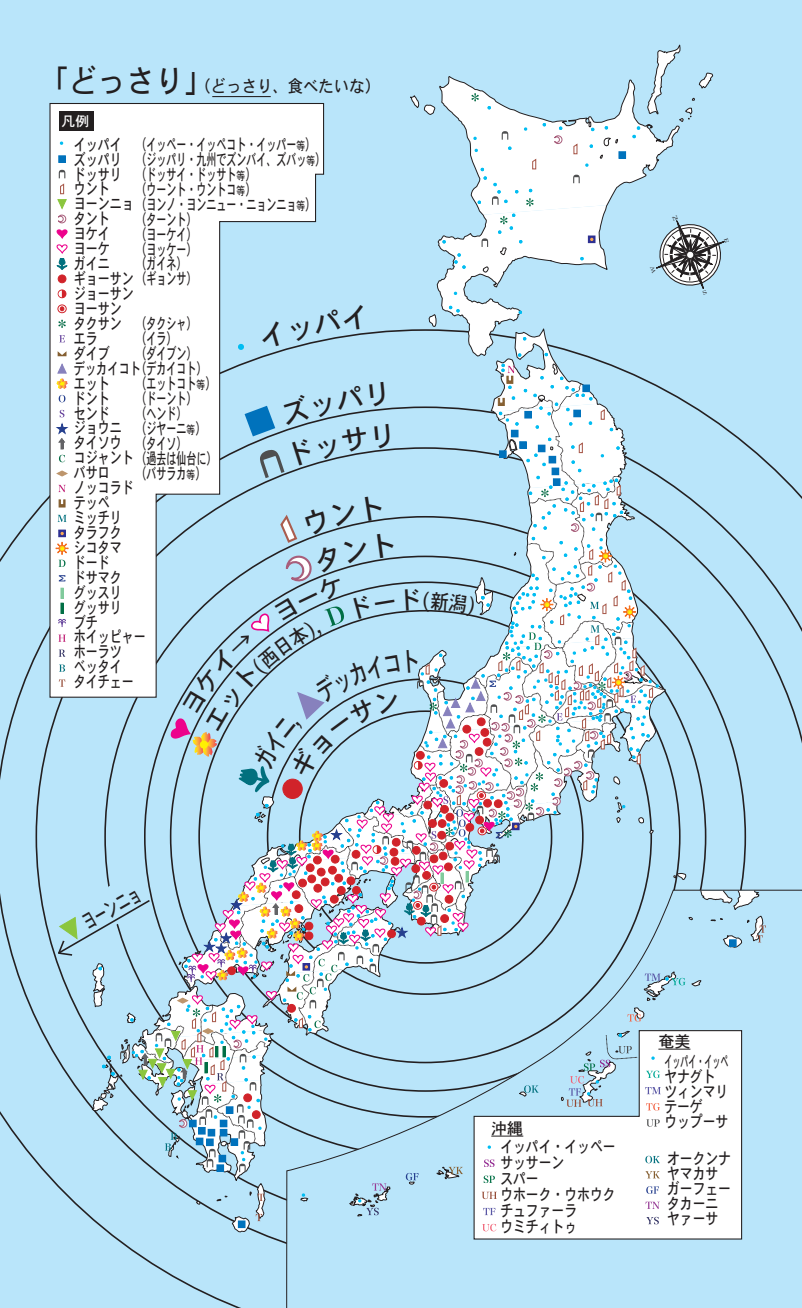


奄美

- イッパイ・イッペ
- YG ヤナグト
- TM ツインマリ
- TG テーゲ
- UP ウップーサ

沖縄

- イッパイ・イッペー
- SS サッサーン
- SP スパー
- UH ウホーク・ウホウク
- TF チュフアーラ
- UC ウミチイト
- OK オークンナ
- YK ヤマカサ
- GF ガーフェー
- TN タカーニ
- YS ヤアーサ



言葉の周圏分布考
松本修・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定価：1,430円（10%税込）
発売日：2022年4月7日
ISBN：978-4-7976-8099-7

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)